

発刊によせて

岩田 誠，河村 満●編

『神経文字学—読み書きの神経科学』

詩を書く立場から
谷川俊太郎

些細な一時的失読，失書は多くの人
が経験していると思いますが，健康な
人間は読み書きを子どものころからほ
とんど呼吸と同じようにしているの
で，コトバを失うことを，たとえば癌
ほどには心配していないのではないで
しょうか。ですがたとえ部分的にでも
読み書きの能力を失うことは，他人と
のコミュニケーションがとり難くなる
だけでなく，生きている世界そのもの
の秩序が崩れていくことでもあります
から，その不安は健康な人間の想像に
あまりです。私はコトバを材料に，詩
という細工物を作る仕事をしています
から，本書を多分他の仕事をしている
人より切実な感じで読んだと思いま
す。

詩はどんなふうにして書くのです
か，というような質問をされることが
あります。パソコンの前に座ってコト
バが泡みたいに浮かんでくるのを待つ
のです，というのが私の答え方です。
浮かんできた数語ないしは一行を昔は

鉛筆で書いていましたが，今はキーで
打ちます。深層の混沌から生まれてき
たコトバが表層で分節されて定着し，
眼に見える形でディスプレイに現れ
る。普通は意識することのない，脳と
眼と手をむすぶその働きの不思議さ，
精妙さを，本書は脳の働きのある種の
欠落から追求し，いわばネガからポジ
を写しだすように私たちに示してくれ
ます。

詩は散文と違ってより多くをいわゆ
る深層言語に負っているのですが，コ
トバの浮かび方は一様ではありません
。詩を書くとき，ほとんどの場合私
には静寂が必要ですが，ときに音楽の
一節が，またときに漢字のある一語が，
またときにはひと続きのひらがなの視
覚的印象が，詩のコトバを喚起するこ
とがあります。それがまず音（声）と
して意識されてから文字になることも
あるし，意味を伴った文字の形がコト
バを導き出すこともあります。こうい
うコトバの浮かび方は，散文の場合と

微妙に違うと思います。詩は時に通常
のシンタックスからはずれ，病的にな
ることすらありますから。

長くともに暮らしていると，夫婦の
筆跡が互いに似通ってくる例は私の身
近にもありましたが，私自身はある時
期，苗字の谷川を書くときの筆跡が亡
父のそれとそっくりになって，少々薄
気味悪い思いをしたことがあります。
別に意識して直した訳ではなく，いま
ではまた父とは違う筆跡になりました
が，たとえば年齢とともに変化するサ
インというもの，また字形は変化して
も筆跡鑑定家が調べれば同一人のサイ
ンだと証明できる事実，そんなところ
にも「神経文字学」という新しい分野
の研究が拓いていく地平がありそうで
す。

A5 頁 248 2007 年 医学書院刊
定価 3,360 円（本体 3,200 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-00493-0]

